

日本人が見た上海イメージ

——『上海案内』の世界——

孫 安 石

SON An Suk

この論文は2010年11月に横浜で開催された国際シンポジウム「中国・朝鮮における租界研究のいま」で口頭報告した「日本人が見た上海イメージ——『上海案内』の世界」に加筆修正した原稿の一部である（シンポジウムの詳細については「第2回公開研究会報告」、『非文字資料研究』Newsletter, 第二十五号, 二〇一一年一月を参照）。

本来であれば、全文を『非文字資料年報』に掲載しなければならないが、本稿の掲載をすでに『近代中国都市案内集成——上海編』（ゆまに書房、復刻版、二〇一一年五月刊行予定）の解題論文として掲載することを承諾しており、今回は前半の部分のみを年報に転載することにした。後半の部分では日中戦争の勃発と観光案内との関係を論じ、『上海案内』という旅行ガイド・ブックが復刻されるにいたる経緯について紹介している。この年報と合わせて、ぜひ一読をお願いしたい。

1. はじめに——上海ガイド・ブックの体験

このたび、戦前上海を訪れる多くの日本人が手にした旅行案内の代表である『上海案内』を含む一連の上海ガイド・ブックがゆまに書房から『近代中国都市案内集成——上海編』として復刻されることとなった。

中国近代史のなかで上海ほど特異な発展を成し遂げた街があるだろうか。上海は様々な顔をもつ。租界に代表される「植民都市」であり、中国共産党が成立した「革命都市」であり、中国人・欧米人・日本人・ロシア人などが同居する「国際都市」でもあった。

この二〇世紀の前半の上海を、欧米人は「冒険家の楽園」、または「東洋のバリ」というあだ名で呼び、日本人は疑似「西洋」を経験できる上海を、憧れと軽蔑が入り混じった複雑な感情で「魔都」と呼んだ。この「魔都」上海という日本人の上海イメージの形成に、谷崎潤一郎、芥川龍之介、村松梢風に至る大正時代の作家の系譜が一定の役割を果たしたことは周知の通りであるが、この日本人の上海イメージの形成にもう一つの大きな影響を与えたのが、今回、復刻される上海ガイド・ブックであるように思われる。

大正十二（一九二三）年に長崎と上海を結ぶ定期航路が開かれるや、上海は日本人にとって最も身近な「西洋」になった。長崎では「下駄」を履いて上海へ、と言われるくらい上海が身近な存在になったのである。しかし、言葉が通じない異国の地である上海での生活は容易なものではなかった。初めて上海に到着する日本人であれば、まずは、人力車と荷車を雇い、大きな荷物を担ぎ、上海の日本

旅館に投宿しながら長期間の滞在のための下宿先を探さなければならない。いよいよ住居が決まれば、次は毎日の食事という普段と変わらない日常生活が待っている。そこで、彼らが向かうべきは文路と呉淞路が交差する虹口市場であった。

「文路が銀座なら呉淞路は日本橋か、其の文路と呉淞路の交叉するところにマーケットがある。肉類、魚類、禽類、野菜さては氷まで、ありとあらゆる日用食品の市場で虹口に住む、支那人は言ふまでもなく内外人は皆此所に日々の供給を仰いで居る。市場は正午までで、午後はポンプを以て大掃除をやる。午前の其振は丁度戦争の如である。」（『上海案内』第一版、四二頁）

その後、何とか上海の生活に慣れ、商売も順調な売れ行きが期待できる人であれば、お酒や花柳界の遊びの作法を覚えておく必要がある。しかし、上海の事情に詳しくない初心者にとっては、どの店に行けばよいのか、見当もつかない。そこで、『上海案内』の「老酒」の項目は次のように上海の老酒の事情について述べる。

「支那人は食ふの人で、日本人は飲むの人である。飲む方より或は淫する方かもしれぬ。正宗、白鶴、澤の鶴、福娘、白鹿、金波などは其淫を助けて居るが茲に下町徒をして荒淫せしむるものは老酒である。（中略）本場紹興酒を售つて居る所は大馬路河南路西に北側の王宝和、四馬路福建路東の言茂源、などは有名な家で二階で一酌もやれる。」

このように上海と日本との関係が貿易や観光などの分野で密接になって行くにつれ、上海での日常生活を案内してくれる旅行ガイド・ブックが必要になるのは言うまでもない。この上海ガイド・ブックを代表したものが、島津長次郎編『上海案内』（金風社、一九一三年、第一版～一九二七年、第十一版）であった。『上海案内』が刊行されたおかげで、上海に不慣れな日本人は生活に必要な様々な情報を取り入れ、上海の発展を特徴付けた租界の歴史はもちろん、上海から中国各地に向かう鉄道時刻表と料金をも把握することができた。また『上海案内』には、当時上海で商業活動に従事していた大小の貿易会社や商店の宣伝広告が大量に掲載されていた。上海ガイド・ブックは、これから上海に在留する日本人にとっては各種の生活情報を手にいれる「指南書」であり、上海に在留したことのあつた日本人にとっては自らが経験した喜怒哀楽を映し出す「合わせ鏡」でもあつたと言い換えることができよう。

ところで、明治、大正、昭和期を通して数多く刊行された上海ガイド・ブックであるが、これを時期別に分けると、大きく三つの時期に分けられるように思われる。

最初は、一九一〇年代に上海で金風社（出版社）を経営していた島津長次郎によって刊行された『上海案内』が中心になった生活ガイド・ブックの時期。そして、一九二〇年代に入り、上海と日本の経済関係が密接になる時期に、上海日本商工会議所が編集に加わって発行した『上海概覧』（一九二〇年版、一九二三年版）、『上海内外商工案内』（一九三五年）など経済情報を主に盛り込んだ貿易ガイド・ブックの時期。そして、一九三〇年代に入り、満州事変、上海事変などで日中関係が悪化する中で出された上海ガイド・ブックの中に戦争の影響が色濃く反映された戦跡ガイド・ブックの時期である。

今回、ゆまに書房が復刻する『近代中国都市案内集成——上海編』は、上記の三つの時期に刊行された代表的な上海ガイド・ブックを集めており、我々は、本シリーズを通して戦前の日本人の上海イメージがどのように形成され、また変容していったのか、その一端を覗いてみることができよう。本シリーズが日本近代史、中国近代史、日中関係史はもちろん、文学、経済など幅広い分野の研究者に

よって活用されることを願いながら、以下、それぞれの時代を代表する上海ガイド・ブックについて、その特徴的な内容を若干紹介していく。

2. 明治期の上海ガイドについて

近代日中関係史の起点をどこに設定するか、については諸説に分かれるが、多くの研究書や著作が共通して記述する内容は、一八六二年に江戸幕府が上海に派遣した「千歳丸」の上海行に参加した高杉晋作と一八六六年に日本初の英語辞書『和英語林集成』の印刷のためにジェームス・カーティス・ヘボンとともに上海へ渡航した岸田吟香の事績に関するものであろう。なかでも高杉晋作が、当時、すでに中国を代表する開港場として浮上しつつあった上海の様子を「遊清五録」に書き留めていることは広く知られる。中でも、上海の街を観察した高杉が、欧米列国の支配下に置かれつつある上海について、

「支那人は尽く外国人の便役と為れり。英、法の人街市を歩行すれば、清人皆傍に避けて道を譲る。実に上海の地は支那に属すると雖も、英仏の属地と謂ふも、又可なり」（『開国』、日本近代思想大系、岩波書店、二一九頁）

と観察し、日本も同じ境遇に落ちないようにすべきであると警鐘を鳴らしたことは周知の通りである。

この幕末以降の日本人の上海体験については劉建輝『魔都上海』（講談社選書、二〇〇〇年）が近代知識人という観点から谷崎潤一郎、芥川龍之介、村松梢風にいたる文学の系譜の概略を紹介しており、陳祖恩『尋訪東洋人』（上海社会科学院出版社、二〇〇七年、日本語訳は大里浩秋監修『上海に生きた日本人』大修館書店、二〇一〇年を参照）は中国と日本側の資料を用いて、上海の日本居留民の実状を紹介している。また、高綱博文『「国際都市」上海のなかの日本人』（研文出版、二〇〇九年）は上海日本人居留民社会の形成と発展、そして解体に至る過程を描いている。但し、これらの先行研究においても上海を対象にした旅行ガイド・ブックは部分的には紹介されているだけで、その本格的な検討が十分になされているわけではない。しかし、近代日本が抱いた上海イメージには、長崎からの上海航路を経由する旅で多くの日本人が手に取ったはずのこれら旅行ガイド・ブックが大きな影響を与えていたに違いない。

上海の日本人コミュニティは一般に日清戦争以降に形成され始め、日露戦争の後に、本格化し、第一次世界大戦を境に大きく発展することになると言われるが、『上海案内』第一版が刊行されたのが上海の日本人コミュニティが発展期に入る時期とほぼ共通している点は注目されてよい。

勿論、一九一三年に『上海案内』第一版が出版されるまで上海について紹介する案内書が全くなかったわけではない。例えば、清末に刊行された葛元煦撰『滬游雜記』（全四巻、一八七六年）を日本向けに編集し直したもので明治の初期に出版された藤堂良駿『上海繁昌記』（一八七八年）の訓点本や一八八七年に農商務大臣に就任する黒田清隆が中国の開港場を訪れた時の報告書『漫遊見聞録』（農商務省、東京、一八八八年）に上海を紹介する内容が含まれていること、そして、荒尾精が創立した日清貿易研究所がまとめた『清国通商綜覧』（日清貿易研究所、東京、一八九二年）の中にも上海に関連する項目が設けられている（西部均「1900～1930年代の上海ガイドに見る日本人の上海へ

の係り方」, 大阪市立大学都市文化研究センター編『近現代の上海・大阪の空間と社会』, 二〇〇六年三月).

なかでも特筆すべきは, 遠山景直『上海』(国文社, 一九〇七年)であるように思われる. なぜなら, 遠山の『上海』は観察の鋭さと記述の正確さ, そして構成のいずれにおいてもきわめて完成度が高く, 島津長次郎編『上海案内』の原型をなしたと考えられるからである. 例えば, 遠山は「上海国」という項目において上海の将来への発展の可能性を次のように指摘している.

「想ふに近き将来に於て, 禹跡神州に世界共通の上海国なるものの靑建せらる々を見ん, 業に近くは公共租界行政の発達, 商業機関の具備, 時勢の必要に促さる々諸工業の漸次勃興せん」とあり, 江南の富を一団とせる金陵蘇杭を連ぬる鉄路あり, 其の前途の多望多事なる真とに似て侮るべからざるの資質を具有せり. 遠くは即ち人種の混血風俗及生活の親和是れなり.」(遠山景直, 前掲書, 四頁)

遠山にとって二十八種の国籍をもつ人民と二十三省の中国人, その他の世界の人種があつまり, 十四カ国の領事が駐屯し, 共同租界によって行政と財政, そして治安が維持される上海の発展は疑う余地のないもので, その発展すべき道は上海を自由貿易港にすることであった.

「斯の如きの国情を齎らす所の上に置かるる上海の担保は自由貿易港として経営し, 呉淞一帯四方数十哩を画して外郭に宛て防備区域とし, 中外官民の責任に帰せしめ, 永く平和にして貿易を隆昌ならしめ, 国富を増進せしむるのことを策するは現下の急務に属せり, 亦支那をして隆盛ならしむるの捷徑たるべきを吾人は確信す」(遠山景直, 前掲書, 七頁)

遠山の『上海』は, 自由貿易港として発展する上海の未来像を鋭く予見する内容を盛り込んでいるだけでなく, 上海から内陸に向かう内河航路の運航時刻と運賃の情報, 呉淞鉄道の運行時刻表を載せるなど旅行ガイド・ブックとしての情報も盛り込んでいる. また, 当時の上海の日本人の社会生活に関する記述もきわめて正確である.

ところで, 遠山は『上海』を著述するにあたって, 上海の日本人に関連する各種の情報をどのように収集することができたのだろうか. 実は, 遠山は当時上海で発行されていた日本語の新聞『上海日報』とその前身にあたる『上海週報』, 『上海新報』などの新聞記事を参考にすることで, その記述の正確さを確保することができたのである.



図1 『上海日報』の表紙(明治三十七年三月十六日, 東京大学, 明治新聞雑誌文庫所蔵)

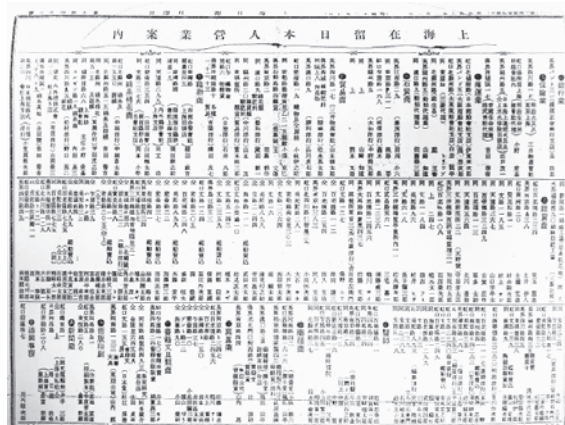


図2 「上海在留日本人營業案内」の記事(『上海日報』, 明治三十九年一月一日, 東京大学, 明治新聞雑誌文庫所蔵)

その事情は、上海と日本の初期の活版製造と印刷との関係において重要な役割を果たした「修文館」の項目で垣間見ることができる。

「明治十七年八月開店、活版製造及諸印刷にして、明治二十三年六月より上海新報と題する日本文新聞紙を発兌せり、館主を松野平三郎とす。

上海新報は週報にして上海に於ける日本新聞紙の最初なり、此以前にありては、岡正康の督する僅かの報告と、三井洋行の商況報告とのみ、惜哉上海新報も収支償はず又松野氏の物故するに遇ひ、互ひに前後して閉店す」

ここで名前がみえる『上海新報』や『上海週報』は、上海で発行された早期の日本語新聞であるが、これらの資料を駆使することによって、遠山は当時としてはまれにみる正確な上海に関連する日本人の記録を残すことができたのである。

例えば、上海で初めて営業を開始した日本の雑貨屋として知られる「田代屋」について、遠山は次のように記述している。

「田代屋 明治元年八月開店、営業は陶器及小間物販売なり、明治十八年の春に至り其商店を金子健二郎に譲りし後ち、古立要造田代屋の称号を以て虹口に旅店を営む。後ち転じて雑菓子店となり、四馬路の西北にあり、後ち雑貨に転じ現に継続す、是れを日本商雑貨店の元祖とす」（遠山景直、前掲書、二二〇頁）

また、遠山が『上海』の最後の部分に設けた「上海在留日本人営業案内」という項目は、実は『上海日報』の明治三十九年一月一日、第三面に掲載された同様の記事を転載したものであったのである。この「上海在留日本人営業案内」の記事にみえる日本人の職業は、すでに銀行業、保険業、海運業、貿易商などの大企業その他、雑貨商、医師、写真業、新聞業、呉服商、理髪店、洗濯業、産婆業、酒・醤油類営業、昼職などあらゆる職種を網羅しており、上海に在留する日本人のコミュニティが形成されつつある過程を如実に物語っているのである。

3. 『上海案内』の世界——上海生活ガイド・ブックの誕生

上海の日本人コミュニティは一般に日清戦争以降に形成され始め、日露戦争の後本格化し、第一次世界大戦を境に大きく発展することになると言われるが、『上海案内』の第一版が刊行されたのは、まさに上海の日本人コミュニティが発展期に入る時期とほぼ重なる。

この『上海案内』の刊行を一手に請け負ったのが、島津長次郎（号を「四十起」という）であった。島津は、明治四（一八七一）年に兵庫県淡路島に生まれ、二八歳で上海に渡航し、幾度か職業をかえた後、華中地域を売薬のために行商し、一九一二年に出版業を志したという。この島津が創立した出版社が金風社であった（初期の名称には金風吟社という呼称が混在する）。島津は、一九二〇年代初期の日本で起きた短詩運動にも参加し、『人間を歌ふ四十起歌集』（一九四三年）を刊行しており、その文学的才能については和田博文「上海在留日本人の出版活動」（『アジア遊学』上海モダン特集、第六十二号、二〇〇四年）が触れている通りである。島津が展開した上海での出版活動は、大きく『支那在留邦人人名録』（一九一三年～一九四四年）と『上海案内』（一九一三年～一九二七年）の発行に分けられる（『支那在留邦人人名録』については、前田輝人「金風社人名録にみる日中全面戦

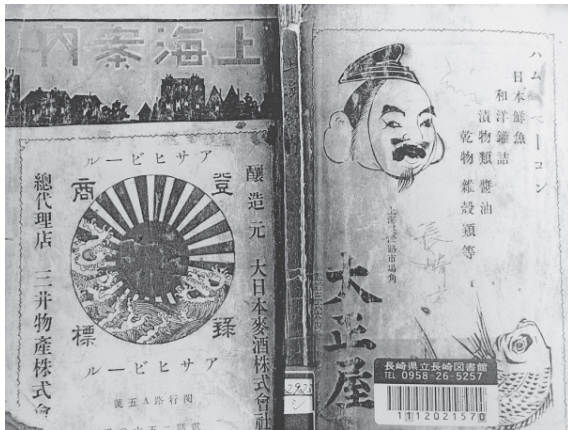


図3 『上海案内』の第一版の表紙（一九一三年刊，長崎県立図書館所蔵）

争期在上海日本人社会の変容』、『アジア太平洋論叢』，二〇〇七年を参照）。

『上海案内』の第一版の目次構成は，最初に上海の沿革と領事館，そして，郵便局，銀行について述べた後，上海の日本人小学校，居留民団，上海名所十二ヵ所などに関連する情報を載せ，「陸上交通」，「外洋航路」，中国国内の各種航路の時刻とその運賃についても紹介し，最後に付録として「上海居留民案内付属電話番号」，蘇州案内，杭州案内，寧波案内を掲載している。

それではここで，『上海案内』第一版に掲載さ

れた幾つかの記事を紹介していく。

まず，日本人コミュニティの中心をなす「日本小学校」については，明治十三（一八八〇）年頃，上海の東本願寺別院内に毎月数回開かれた講話会が三年後には親愛会に発展して上海の日本人に算術読書を教授したことから始まり，明治四〇（一九〇七）年九月の居留民団の設立に伴い学校の運営が居留民団にゆだねられ「現在の生徒数は男二五三名，女二一三名，そのうち幼稚園生徒，男二十四名，女子，十九名である」と記述している。上海における東本願寺の布教活動の中で重要な一部が教育活動で，『上海案内』の記事に見える親愛会はのちに明治二一年には東本願寺院内の「私立開導学校」に発展し，一九〇七年には居留民団立に組織をかえることになることからこの記述が正確なものであることがわかる（柴田幹夫「上海日本居留民と仏教」，日本上海史研究会編『上海——重層するネットワーク』研文出版，二〇〇〇年）。

また，のちの上海日本商業会議所に発展する上海実業協会の成立について次のように紹介している。

「実業協会は明治四十四（一九一一）年十一月の組織にして，其規則第二条に会の目的は左の四項を掲せてある。

- 一．上海に於ける商工業の発達を図り之に必要な方案を調査すること
- 一．上海に於ける商工業の利害に関し意見を表示すること
- 一．上海に於ける商工業の状況及び総計を調査すること
- 一．会員の委嘱に因り商工業に関する事項を調査すること（中略）実に帝国商権の拡張を計る一大機関で吾人は上海居留民の頭脳とも称す可き此協会あるを誇とするものである。」

また，『上海案内』には当時の日本人の上海での生活を鋭く描いた記事も多い。例えば「湯屋と悲しみ」は，次のように異国上海での生活を描写している。

表1 『上海案内』の出版状況（奥付により判別できたもの）

	発行年	発行兼編集人	印刷所	発行所
第1版	1913年 1月 11日	島津長次郎	蘆澤印刷所	金風吟社
第2版	1913年 11月 20日	島津長次郎	蘆澤印刷所	金風社
第3版	1914年 4月 10日	島津長次郎	蘆澤印刷所	金風社
第4版	1915年 1月 1日	島津長次郎	蘆澤印刷所	金風社
第5版	1915年 9月 25日	島津長次郎	蘆澤印刷所	金風社
第6版	1916年 5月 25日	島津長次郎	蘆澤印刷所	金風社
第7版	1917年 3月 30日	嶋津長次郎	堀越日進堂	金風社
第8版	1919年 12月 1日	島津長次郎	蘆澤印刷所	金風社
第9版	1921年 2月 5日	島津長次郎	蘆澤印刷所	金風社
第10版	1924年 5月 31日	島津長次郎	蘆澤印刷所	金風社
第11版	1927年 5月 18日	杉江房造	蘆澤印刷所	日本堂

「日本人の植民生活に付纏（つきまと）ふものは畳と沢庵と風呂桶とである。畳は非文明的であるが一日奮闘の体を畳の上でアグラをかいて繕に向ふ時の心持は神に接する如な慰安で日本人はどうしても此畳を離れ得られない。又沢庵は賤しい如であるが食後此一片がなかったならば如何な珍珠も打ち消さるる如な思がする。湯に至つてはよく日本人の清潔を好む性情を露はしている。是なくては如何な植民地の果でも過ごし得られないのである。」（『上海案内』第一版、六十一頁）

この記事によれば、上海に日本人向けの湯屋ができたのは明治三十八年の海寧路の岡田雑貨店に四、五人が入れる男女混浴がはじまりという。この湯屋は翌年には簡易の暖簾を掛けた天狗湯、清瀧湯へ変わり、さらに虹口地区の文路のやまと湯へ変わっていったという。

その他、『上海案内』は中国人や欧米人の生活にも強い関心を寄せていた。例えば、中国で生活するか、旅行する人であれば避けては通れない中華料理については、「支那料理」という項目を設け次のように解説する。

「支那に足を踏み入れたものは否やでも応でも此支那料理に馴染まねばなるまい。（中略）蓋日本料理は墮落的にして非文明的である。支那料理は時間的にして規則的である。支那料理は一時も裕余をして居られない、一品がテーブルに運ばれる々や、同席者の一人が一箸を入れるれば他の七人若しくは九人が一箸を染めないでも次の料理の運ばれる々時は如何に惜しむども甲斐なく持ち去られる々である。」（『上海案内』第一版、三十一頁）

そこで筆者は中華料理を食べる人に「最初から猛に食らつて、後の真の美味しい料理の出る時には、最早満腹で肝心の珍味を箸をも着けずに、見すく運び去る々遺憾と滑稽を演ぜねばならぬ事が多いから君子宜しく未来の計を卓上にめぐらし、満を持して放たざる底に進まねばならぬ」と付け加えている。

また、欧米人の一大娯楽である「競馬」については、一回の賭博で巨万の富を築こうとする欧米人の生活ぶりを次のように紹介する。

「上海に於ける外人の最大娯楽は競馬の外にはない。（中略）其の四日間は上海の外国商館及日本の重だつた会社は、皆休業する。外人の是れに熱中することは非常なもので毎年競馬の前月は店の支払を延べたり、甚だしきは自分の妻を質に於いて資金を拵へた、と云ふ人の話を聞いたこともある。（中略）競馬は上海の空気を色濃く彩る一大上海日である。又上海の命とも言へ如う。」（『上海案内』第一版、二九～三〇頁）

ところで、『上海案内』の第一版の刊行は容易なことではなかった。島津は『上海案内』の第一版の「編輯の後に」で、出版にいたるまでの苦労を次のように述べている。

「友人、知己の助力に依って出来たものがこんな杜撰なものであるのは期待された人々に叩頭せねばならぬ。然し、来年発行の分は其欠を補ひ完全なものに仕たいと思つて居る。在留民案内などは印刷所から二三度催促を受ける迄調べたものであるが、夫で居て実に疎漏なものであるのも謝せねばならぬが之には少なからぬ労力と費へとを要した。（中略）大部分の費用を割かれた総頁数は、最初百頁位の予算であったのが、此二百余頁のものとなつた。」（『上海案内』第一版、八二頁）

とくに、『上海案内』発行を年末に予定したのがさらなる困難を招いたらしい。

「印刷所からは火花を散らす如な年末多忙の際頁数の増へたのは好ましくない」と主客転倒の小言に遇ふ始末で昨年十二月十五日発行が二十日となり二十日が二十五日、二十五日が終に本年一月六日、

六日が又も十一日と言ふ逆待に逢ったのは編集者を甚く困らしめた。」

また、この『上海案内』の出版に一部の人は協力的ではなかったことも、島津は隠していない。即ち、島津は、「在留民案内に就ても親切に漏らして呉れた所は多かったが中には冷淡であったのや掲載を断はられた会社などもあったのは何日迄も遺憾とする所である」と記している。

以上、『上海案内』第一版の体裁と内容について紹介してきたが、この『上海案内』第一版の体裁は第七版（一九一七年）になると大きく内容が補強され、旅行ガイド・ブックとしてカバーする範囲も蘇州、杭州、寧波をこえ、九江、漢口、済南、青島を含み、総頁数も六〇〇に達することになった。この『上海案内』第七版は、上海現今、行政、財政、衛生などの部門に分けて上海の状況を記述しているが、とくに、租界と工部局の行政全般に関する紹介の部分が以前の版本に比べれば、かなり補強されていることがわかる。

例えば、「工部局警察」という項目には共同租界やフランス租界の警察所（巡捕房）の所在地と電話番号は言うまでもなく、欧米人が担当している警察部長、警務部長、一等警視、二等警視に続いて、外国人騎馬警部、中国人巡查部長などの職名と年額の給料までを載せている。

また、外国人と中国人の間の法律問題を解決するために設置された共同租界とフランス租界の会審衙門（Mixed Court、混合裁判所）の組織と訴訟の手続き、審理の方法と判決、判決執行の方法、上告裁判と欠席裁判、用語と用文などについても多くの頁を割いて紹介しており、上海の共同租界やフランス租界で日本人が関係する刑事・民事裁判が行われる時にどのような言語が使用されるのかについても詳細に記述している。

例えば、原告が日本人で被告が中国人の時の民事裁判で、原告弁護人が日本人、被告弁護人が外国人の場合は、

「原告は日本語にて陳述し、原告側弁護士（又は通訳）は之を支那語に訳す。被告は支那語にて供述し、原告弁護士は日本語又は英語にて供述したる上更に之を支那語に訳す。被告弁護士は英語にて供述したる上更に之を支那語に訳す」

という手間がかかることを会審衙門に務める西田畊一の言葉を借りて説明している。

その他に、中国の商慣習について紹介する「看板」、「字号」、「商標」という項目も注目されてよい。例えば、「看板」は

「支那は何処までも粉飾の国である。商家の看板の如きもその一で店頭振はざるにも拘らず看板に巨費を投じ金色燦爛たる素晴らしきものを掲げてある。繁華なる街に入れば両屋の看板空を蓋ひその彫刻の美、燦然たる金色恰も宮殿に行く思の所がある。（中略）人眼を惹くには眩ばゆい程金色を塗り立てて、コケ威しに威すがよいとは支那人の理想らしい。」（『上海案内』第七版、一七四頁）

と指摘し、日本から中国向けに輸出する商品の「商標」で日本人が最も注意すべきものとして次の事項を紹介している。

「支那人の習慣と迷信は頗る強く、以上列記のものは好んで商標図案に使用するが、之に反して絶体に忌避するものがある。即ち、亀の如きは日本では万年の齡と称し瑞祥の動物として尊びたへられ、鶴と共に多くの商標に用ひられてあるが、支那では正反対に烏龜又は忘八、即ち仁義忠孝礼義悌信の八を忘れたるものと称し最悪最劣のものとして最も忌み厭はれて居る」（『上海案内』第七版、一七九頁）

また、旅行案内の定番である中華料理の項目には「蟹」という新しい項目が設けられている。

「終に料理でないが料理に附随した秋の蟹を是非紹介して置かねばならぬ。（中略）日本のカラスミ、海鼠腸なども珍味として酒徒の賞美して置かないものだが、秋の支那蟹はそれ以上で一度之を味へば忘れられない程の美味を持って居る。（中略）蟹は長江沿岸何処でもあるが、上海附近では蘇州に近き、唯亭洋澄河の蟹が最も甘いと言はれて居る。」（『上海案内』第七版、一七〇～一七一頁）

勿論、『上海案内』の中には中国人を露骨に差別する記述が含まれているのも事実である。例えば、上海に不案内な日本人が上海を歩く時に最も頻繁に利用する人力車の車夫が法外な料金をとり、場合によっては強盗になる場合もあることを「悪車夫」という項目で紹介している。

「で彼等の目指す所は料理屋の客である。料理屋より出る客は皆金を持って居る。若し金がないにしても時計指輪類は必ず持って居るし、良い服も着て居る上に帰る時は必ず酔ふて車上で寝て何処に曳き行くかも覚へないのを幸に車を人通稀な場所に曳き込み同類相集り車上の酔客の所持品を強剥するのである。（中略）上海の事情にも地理にも馴れない船の人などは上海の車夫の悪いことは知らないで何チャンコロだと満州の戦争で見た支那人の如く見くびって言葉も知らずに車に乗り、女の居る処へやれなど命ずるから車夫の方は一枚上だ」（『上海案内』第七版、一八七頁）

そこで『上海案内』は、人力車に乗る時には「可成人相の良さそうな人間と風体の田舎者然たる者を撰んで乗るべしである。決してよい風体をした者や菊目石のある奴（必ず悪人なり）やシャレタ風をした奴や馴々しくアナタなどと言ふ奴に乗るものでない」と自衛策を講じるべきことを書き加えている。

『上海案内』は第七版の刊行をもって上海を中心とした華中地域の案内書に一区切りをつけ、華北の北京、天津などを取り入れた中国案内の集大成をなそうとした。この間の事情を「上海、漢口、青島案内」という項目は次のように語っている。

「上海案内は大正二年一月第一版を創刊し爾来、蘇杭州、寧波、温州、鎮江、南京、撫湖、九江の案内及在留人名録を加え毎年二回之が訂正を施し、日本人唯一のガイド且つホング・リストとして在留邦人及新来者の欠く可らざる重要出版物たり。本社は尚之に慊らず、今回当港と最も商業上の関係重き漢口、青島及び済南案内を之に加へ名を『上海、漢口、青島案内』に改め、此七版を以て其大発展版となせり。是れを以て先本社は第一段の目的を達したり。第二次は更に進んで北京、天津、芝罘、旅順、大連案内を発刊し以て、支那案内の完全を尽さんとす。」（『上海案内』第七版、二一八頁）

しかし、島津の中国全土をカバーする旅行ガイド・ブックを刊行する計画は、島津が経営する金風社のもう一つの経営の柱をなしていた『支那在留邦人人名録』の刊行へと力が分散されて実現することがなかった。その間の事情を

「大正六年十二月、前記案内記は別に案内記のみを発行することとし、従来の人名録を離し始めて茲に『支那在留邦人人名録』と題し、更に済南、湖南方面を加へ、第八版を刊行したり。第九版は更に北京天津の人名を加へたり。大正八年三月発行の第十版には更に香港、広東、重慶を加へ（以下略）」（『上海案内』第十版、「邦人案内」の三九頁）

このような事情もあり、『上海案内』の第八版、第九版、そして、第十版はそれぞれ一九一九年、一九二一年二月と一九二四年五月に刊行されるものの、その体裁は従来の第七版の目次と内容を踏襲するものであった。しかし、この時期に島津の『上海案内』は上海の旅行ガイド・ブックとしてすで

に確固たる地位を保持していた。その一端は、『上海案内』に寄せられた上海総領事、東亜同文書院院長らの次のような推薦の言葉からも察することができよう。

「世上所謂案内記なるもの多きも其実、名に背かざるもの蓋し稀也。島津君第八版『上海案内』を予に示して序文を求めらる。是を通覧するに体裁具備、資料斬新、克く案内記の名に添ふものと云ふべし。一言を寄せ同君の需に応ず」(山崎馨一、上海総領事、『上海案内』第九版より)

「此の際上海のみならず広く支那諸般の事情を江湖に紹介する為め努力しつつある金風社に於て茲に本書の増訂再刊を計画するは洵に有益の措置にして世人を裨益すること鮮少にあらざる可し一言以て序文となす。」(矢田七太郎、元東亜同文書院院長、『上海案内』第十版より)

「島津君の『上海案内』は大正二年発行以来版を重ねる事茲に十回、内容年と共に補修せられ面目回を追ふて又新、上海を知らんとするもの々案内書として誠に好個のものと思ふ。」

(横竹平太郎、上海駐在商務官『上海案内』第十版より)

勿論、『上海案内』が一九一七年以降の上海の新しい出来事について手を抜いていたわけではない。

この一九一七年以降の上海の都市文化に最も大きな変化をもたらしたのは、一九一九年に上海一の繁華街の南京路に中国人の資本による先施百貨公司、永安百貨会社が登場したことであるが、『上海案内』はこれらデパートの営業がもたらした社会の変化について「先施公司」の項目で次のように紹介している。

「屋上は庭園で上海市の全景が一眸の中に収まる。庭園に入るには二角の入場料を要す。これを払ふて入れれば新旧劇、活動写真、講談、手品と云ふ如なものが随意に見られ休息するにチャがあって茶でもコーヒーでも命ずることが出来ることになって居て新世界、大世界などと少しも変りがない。之を要するに日本の三越に遊樂園と料理部と旅館の三営業を付け加へたものである。然し建物の構造が三越の如にコセつて居ないで大陸的な祐通りがあるのがよい。売品の中に日本品が甚だ少ない。」(『上海案内』第十版、三五三頁)

しかし次の第十一版になると、『上海案内』は島津の編纂ではなく杉江によって編集されたものであったらしい。この間の事情を「はしがき」は次のように記述している。

「本書は大正二年一月に島津四十起氏により上梓せられて以来、歳を閲すること十五星霜、版を重ねること十回に及んだものでありまして、此長年月間に於ける上海の変遷は誠に驚くべきものであると同時に本書の内容も改版毎に著しき更改を加へられ(中略)先般発行者が島津氏より著作発行一切の権利を継承いたしました機会に内容の大刷新を企て、『上海共同租界法規全書』の編者山崎後月氏を煩して各般の調査修正を遂げ、複雑極まる上海の事情を如実にして茲に第十一版を公にする次第であります。」(『上海案内』第十一版)

いよいよ、上海は新たな時代を迎え、従来の『上海案内』とはまた異なる人々の要求が高まりつつあった。以下、その変化の一つを上海に対する日本の経済進出に焦点を合わせてみていくことにする。

4. 上海日本商工会議所と『上海概覧』(一九二〇年版)の刊行

一九二〇年代に入ると、上海と日本との関係は紡績業を軸に新たな展開を迎えることになる。すな

上海での紡績業の急速な発展は、貿易に関連する情報の需要が急増することを意味するものであった。この日本側の貿易関係の情報を一手に集めていたのが上海日本商業会議所である。

[illegible]

図4 「上海日本商工会議所会員」の名簿（外務省外交史料館，請求番号E-2-6-0-1-3，所収）

[illegible]

図5 「上海日本商工会議所賛助商社」の名簿（外務省外交史料館，請求番号E-2-6-0-1-3，所収）

「創立以来毎週一回週報を発行し、上海を中心として経済上に於ける実業界の消長、変遷、商況、統計等の調査を発表する機関とせる外、定期出版物としては毎月一回上海港貿易統計月表、年一回上海輸出入貿易明細表及会議所年報等を刊行」（『上海案内』第九版、三二頁）していた。

また、「其他、時々重要な支那經濟界の指針たる可き調査書を発行して對支実業家の為め常に好個の資料を提供しつつあり、之等金玉の報告及刊行書は当初、會員及關係者のみに頒布して非売品たりしも近來一般の輿望を容れ広く公開」する活動を展開していた。そして、このような上海日本商業會議所の活動は、上海の旅行ガイド・ブック『上海概覽』（一九二〇年）の刊行として現れる。

191

項目)や邦人案内(上海居留民団, 日本小学校, 在留邦人職業別表などの項目)がなくなり, 電気, 電燈, 水道など社会インフラに関連する項目と記述が増えた他, 上海の金融機関や出入り船舶表などに関連する項目が新たに新設されている。中でもとくに圧倒的に増加する項目は上海の貿易と深い関連のある港湾や日本資本の進出が目覚ましい紡績関連の記述である。

例えば, 上海港に入港する船舶が停泊する区域は上海税関長による専管事項で, 汽船会社や大手の貿易会社が停泊する区域は予め, 決まった碼頭に限られていたが, 『上海概覧』(一九二〇年版)にはその詳細が記載されている。

表2 黄浦江の各区における碇泊碼頭(部分, 『上海概覧』, 「碇泊区域と埠頭」, 五十頁より作成)

区 画	港区	上海側	浦東側
上区(A) —江南製造局船塢より白蓮涇港に至る	上区	江南製造局碼頭	上海造磚公司碼頭
	上区	寧紹碼頭	麦辺洋油棧碼頭
上区(B) —白蓮涇港より支那街南碼頭南端に至る	上区	—	董家渡船梁
	上区	—	怡和洋行董家渡碼頭
上区(C) 一支那町の南端より其北端十六舖橋に至る	上区	—	日清汽船会社碼頭
	上区	—	大倉益昌碼頭
	上区	—	東清鉄路公司碼頭
	上区	—	招商局碼頭
第一区—支那碼頭の北端より金利源碼頭最北倉庫に至る	第一区	金利源碼頭	美最時爛泥渡碼頭

また, 従来の上海ガイド・ブックには詳細が掲載されることがなかった中国の「対外貿易国別対照表」, 「中国出入国別船舶表」, 「上海出入船舶表」が新たな項目として掲載されている。中でも異彩を放つのは, 上海を舞台に熾烈な競争を展開したと言われる日本と中国の紡績業に関連する項目であろう。

『上海概覧』は紡績業の他に, 繰綿工場, 絹綿布工場, 製糸工場, 絹糸紡績と精鍊, 毛織物, 製麻工場などの項目を設け, 綿紡績関連の情報を集約している。

以上のような貿易を最優先する見地から, 島津の『上海案内』が日本人社会との関連に重点を置いた記述であったのとは違い, 上海と貿易という側面にもっばら注目している。例えば, 次のような記述がある。

表3 上海の紡績関係一覧表(部分, 『上海概覧』, 紡績業, 一〇三頁より作成)

会社名	国籍	資本金		運転錘数	織機台数	所在地
内外綿	日本	5,000,000 円	第三工場	23,000		上海
			第四工場	40,000		上海
			第五工場	65,440		上海
			第六工場	20,000		青島
			第七工場	—	600	上海
			第八工場	31,680		上海
			第九工場	26,936		上海
上海紡績	日本	2,000,000 円	第一工場	20,392	270	上海
			第二工場	25,480	510	上海
			第三工場	50,000		上海

「港内の管理は支那政府の任命する外人(英国人) 港湾局長の手に帰せしを以て, 爾来港内の浚渫, 護岸工事, 繫船浮標等の設備着々歩を進め, 今や一万噸の巨船も高潮に乗りて出入するを得て繁栄日に加はりつつある而已ならず, 更に彼の巴奈馬運河の開通するに及び上海亦之に響鳴し, 更に大船巨舶の出入りを可能ならしめ以て, 東洋の倫敦たらしめ

んとの見地より現に上海港大築港の計画中にして前途益々発展の道程に在り」(『上海概覧』、二頁)。

そして、上海における商工業関連の情報は『上海内外商工案内』(上海商工会議所編、一九三五年)としてさらに詳しさを増してゆく。『上海内外商工案内』は一九三五年、当時の上海商工会議所が把握しているほぼすべての商社を(1)銀行業、(2)港運業並に倉庫棧橋業、(3)紡績工場、(4)其他各種工場、(5)一般輸出業、(6)雑之部の合計一八三頁にまとめ、その上、邦人輸出品取扱商一覧(五一頁)、支那人営業種類別一覧(一三五頁)、邦人営業種類別一覧(八三頁)の合計約四〇〇頁にわたって整理している。

表4 日本郵船株式会社(上海共同租界黄浦灘路三十一号)の部分
(『上海内外商工案内』、七頁より作成)

商号	支那にて使用する名称	日本郵船株式会社	支店又は出張所の所在地	横浜、名古屋、大阪、神戸、門司、長崎、上海、大連、青島、漢口、香港、広東、新嘉坡、甲谷陀、孟買、倫敦、リバプール、紐育、市俄古、シアトル、桑港、羅府、ホノルル	
	英文名称	Nippon Yusen Kaisya (N.Y.K.)	商社の組織	株式会社	
設立年	明治 18 年 10 月 1 日		資本金	106,250,000 円	
開業時日	本店開業時日	明治 18 年 10 月 1 日	資本金の払込未払込及一株金額	未払込株金 一株額面金額	42,000,000 円 50 円
	上海に開業時日	同右(但し前身三菱会社上海支店開設明治 8 年 2 月 4 日)			
本店の所在地	東京市麹町区丸ノ内 2 丁目 20 番地 1				
支配人又は代表者氏名	取締役社長 各務謙吉 上海支店長 山本武夫		倉庫	建物坪数	虹口 (13,510 延坪) 匯山 (14,242.89 延坪) 浦東 (5,992.58 延坪)
当地本支店在勤社員数	上海支店在勤社員数 43 名			棟数	虹口 (8)、匯山 (16)、浦東 (4)
営業種類	海運及倉庫業		棧橋	河岸面の長さ	虹 口 (938.6 呎)、匯 山 (912 呎)、浦東 (1,064 呎)
代理関係	本商社が代理する商社	1. 近海郵船株式会社 2. 朝鮮郵船株式会社		経営開始の年月日	虹口 (明治 18 年 10 月 1 日) 匯山 (大正 3 年 3 月) 浦東 (大正 13 年 10 月)
取引銀行	横浜正金銀行			買収の年月日及前所有者氏名	虹口 (明治 18 年 10 月 1 日三菱会社より継承)、匯山 (大正 3 年 3 月築造)、浦東 (大正 13 年 10 月築造)
電信略号使用暗号	電信符号 電信暗号	Yusen Shanghai 社内特別暗号及 Bentley Code	艀	艀隻数及噸数	サンパン 2 隻
倉庫	敷地及面接	虹口 20,256 畝 匯山 82,221 畝 浦東 75,161 畝		小蒸気数及噸数	金陵丸 (131 総噸) 蘇州丸 (22 総噸) 龍華丸 (35 総噸)

上記の表4から、『上海内外商工案内』がまとめた情報が極めて詳細、かつ正確なものであったことを窺うことができる。しかし、このような上海における日本の商工業の進出は、一九三一年の満州事変と第一次上海事変、第二次上海事変(一九三七年)をへて、上海経済の独占と占有を目指すものとなった。すでに時代は、上海の貿易をめぐる争いをはるかに超え、戦争の時代へと大きく変わろうとしていたのである。この間の事情を、『上海要覧』(一九三九年)は、「事変の影響」という項目の中で次のよう記述している。

「一九三五年支那の工業界は不況のドン底にあって、操短或は休業、改組、または工場に対する抵当権の実行による競売、若しくは譲渡と云ふ悲惨な状況が続いたが、翌三六年に形勢は一変して好況

に向かった。(中略)斯くの如く上海の工業は事変前迄は大体好況を示し、工場建設も多少乍ら実現しつつあったのである。かかる矢先きに上海は日支両軍の激戦地となり、邦人の紡績工場は勿論、支那並に英国の紡績工場乃至其の他各種の工場は十中八、九は閉鎖、休業の已むなきに至ったが、戦火の為焼失の災に遭ったものも少なくなかった。」(『上海要覧』、一九三九年、一四二頁)

さらに、日中間の戦闘によって上海附近で焼失した紡績工場だけでも九〇五工場に達し、その他の中国人が経営する工場の被害も約一〇〇〇工場に上り、紡績関係の工場が被った被害総額は七五〇〇万円に上ると推定されるという記事を掲載している。

しかし、『上海要覧』が紹介したこれらの被害は紡績業に限られたものであり、『上海要覧』はさらに、その他の工業を含めた上海の全域に渡る中国側の工場被害は二〇〇〇余件に及び、被害は閘北一〇〇％、共同租界七〇％、浦東五〇％でその損害総額は内輪に約八億元と報告されていることから、中国の「工業生産能力は殆んど全滅に瀕した」と記している。上海の経済はいよいよ戦争の足音に圧倒される時代を迎えたのである。